

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 27 年 6 月 11 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520186

研究課題名(和文) ドイツにおけるヴェルディ・オペラ受容の歴史的変遷とその意味をめぐって

研究課題名(英文) On the historical transition and the meaning of reception of Verdi's opera in Germany

研究代表者

丸本 隆 (Marumoto, Takashi)

早稲田大学・法学大学院・教授

研究者番号：60030186

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：日本ではオペラ(そしてヴェルディ)研究の立ち遅れが目立つ。本研究者はその現状を踏まえ、前回の科研費で開始した「ドイツとイタリアの関係性」の視点によるヴェルディ研究を発展させるものとして本研究を位置づけ、ドイツにおける受容に焦点を絞りつつ、ヴェルディ・オペラの解明を試みた。そのために海外に出張して研究者との交流や資料収集を行うなどして、資料の解読とデータベース化に努めた。その結果、ヴェルディ・オペラの、独・伊の文化的文脈に沿った受容の違いを分析し、その洞察を深めることができた。成果の一部は学会での発表や紀要で公表し、当初予定した本研究テーマによる出版物の刊行へとつながる基盤が形成された。

研究成果の概要(英文)：This research aims to contribute to promote Verdi scholarship which has been undeveloped in Japan so far regardless of its importance, and to deepen the subject concerning "relationship between Italianity and Germanness in Verdi" by focusing on the reception of his operas in Germany. As it was especially indispensable to assimilate the advanced studies undertaken overseas, the main task was to go abroad to communicate with scholars and to undertake research at libraries. Results on the Verdi reception in Germany derived from gathered information and materials were made public at academic meetings and bulletins; moreover, they are expected to be published later.

研究分野：演劇学・オペラ研究

キーワード：ヴェルディ オペラ受容 ナショナリズム リブレット ドイツとイタリア

1. 研究開始当初の背景

(1) オペラはその重要性にもかかわらず、本格的に学術研究の対象となるのは比較的新しく、日本では代表的なオペラ作曲家ヴェルディの研究ですら大きく立ち遅れている。他の多くの分野に比してオペラ研究がそうした状態にある背景には、パフォーマンスアートという芸術形態が、西洋の伝統的な学問体系の枠組みに容易に組み込まれえなかったという事情に加えて、「音楽」「演劇」を融合した総合舞台芸術であるオペラを研究対象とするには、それら二分野への専門的アプローチが求められるなどの難しさがあり、そのためオペラと深く関連するはずの音楽学や演劇学においてすら、長らくオペラは確固たる研究領域を占めてこなかったという要因がまずもって考えられる。(この点に関して本研究者は、編著『初期オペラの研究』(彩流社、2005)の「オペラ研究の課題と現状」、『オペラ学の地平』(同、2009)の「オペラ学の確立を目指して」、および最新の論考「オペラの「虚像」と「実像」—オペラは研究対象となりうるか?」(『人文論集』2014)で詳述している)。1970、80年代、そうした状況が大きく変化し、「表象」「メディア」「身体」といったキーワードとともに既存の方法論を超越した学術研究が活気を帯びるにつれ、オペラ研究も大きく発展するが、本研究で取り上げるイタリアのオペラ作曲家ジュゼッペ・ヴェルディ(1813-1901)の研究もその流れの中で本格化し、1990年代半ば、世界最大の音楽辞典 *MGG* の当該の項に「端緒についたばかり」とも記述された研究は、この十数年間、目覚ましい進化を遂げてきた。当初先導役を担ったイタリアに加えて、とりわけ英米やドイツで、ハイレベルな論文や研究書が続々と出版され、近年オペラ研究がますます厚みと広がりを増しつつある。その一方で日本では、実践面では世界の「オペラ文化圏」の一翼を担うほど活況を呈し、オペラに

関する情報も溢れかえっているが、学術研究の分野では、国際的な流れに乗って最新の成果を吸収し、この国独自のオペラ研究を確立するといったレベルにはほど遠い状況にある。学会誌に掲載されるオペラ関連論文がごくわずかなことにもみられるように、専門的に越境可能な研究者ですらオペラを研究対象とみなす発想が乏しく、学術分野でオペラが市民権を得ているとはいえない。

(2) 本研究者は長らく演劇学的研究に携わり、その基礎の上にオペラ研究に踏み込んだが、前述のような現状のもとでオペラ研究の必要性を痛感し、21世紀初頭に開始された早稲田大学演劇博物館の COE プログラム(2002-2006年度:21世紀 COE、2007-2011年度:グローバル COE)に推進担当者として加わり、オペラ/音楽劇プロジェクトを立ち上げて、オペラ研究の拠点形成を目指してきた。本研究課題との関連でいえば、そこで多岐の専門にわたる研究者を結集した学際的な共同研究や、研究書の出版を通じて学びあう中で、地域・時代を超えたオペラについての知見を広げつつ、ドイツ・オペラに加えてイタリア・オペラへと研究の幅を広げ、2009年度からは科学研究費によるヴェルディ研究に携わることになった。本研究者のイタリア・オペラへの興味の広がりや、それがオペラのメジャーでありながら、日本では学術面での研究が等閑視されていることへの危機意識とも結びついている。ヴェルディに関する文献も量的には豊富だが、多くは解説のレベルにとどまる。その代表的著作である永竹由幸『ヴェルディのオペラ』(音楽之友社、2002)や高崎保男『ヴェルディ全オペラ解説』(同、2011-)も、ヴェルディを熟知した著者の手による情報源としての価値は高いが、学術的なアプローチを目指したものではなく、注や参考文献の記載の点も含めて、先行研究との接点が見られる研究書の出現が求

められるところである。こうした現状には、明治以来、圧倒的な影響を及ぼしてきた「ドイツ」に対して「イタリア」の基盤が特に学術面で弱く、またイタリア・オペラの研究には、英・独・伊語等が必要とされるといった事情が反映されている。以上みたような状況に風穴を開け、日本におけるオペラ研究の飛躍に貢献したいとする思いが本研究の最大の動機となっている。

## 2. 研究の目的

(1) 本研究者は日本におけるオペラ、とりわけヴェルディの研究の後進状況に一石を投じるべく、2009年より3年間、科研費により「イタリア」と「ドイツ」の関係性をめぐり、①ヴェルディとシラー劇、②ヴェルディのオペラ革新とドイツ音楽、③ドイツのヴェルディ受容の3点を手掛かりに、ヴェルディ・オペラの考察を進めてきた。本研究はこのうち、近年このテーマとクロスする有力な研究成果がいくつか現れ（特に Kreuzer, Gundula. *Verdi and the Germans*. Cambridge, 2010）、受容を通じたヴェルディ・オペラ再検討の重要性が認識され始めた③のテーマに焦点を絞り、それをさらに深化させていくことを目的とする。

(2) 本研究では、19世紀の中頃、ヴェルディ・オペラと出会ったドイツの知識層が、当初冷淡な反応を示したものの、後に肯定的な評価に転じる事実注目し、ヴェルディが圧倒的な影響力を誇る現代ドイツのオペラ文化に連なる歴史的経緯を探るとともに、「ドイツ」という鏡に照らしつつ、ヴェルディのオペラの本質により深く迫る。そのため特に受容初期の19世紀にみられた二つの特徴的な側面の考察を試み、ドイツにおけるヴェルディ・オペラの上演について、何編かの作品を例に、主にイタリアでの初演の実態と比較しながら、観客や批評界の反応を探る。この時期、ヴェルディ・オペラは、広範な観客に

支持される一方、音楽界などで否定的に評価される傾向にあったが、イタリア・オペラ全般に向けられたドイツ優位、「芸術」優位の発想とも関連する後者の意味を、新たに収集予定の当時の新聞・雑誌類をも読み解きながら考えていくのがより具体的な目的である。

(3) 一方、当時ヴェルディがドイツで一般レベルにおいて好評を博する背景に、多くがドイツ語で上演されたという事実がある。やがてその独訳は、ドイツ語の詩形に合わせた、楽譜の変更をすら要求する「オペラ・ドイツ語」として特有の発展を遂げるが、ドイツの文化的土壌に同化させながらのこうした受容はヴェルディが、知識人を含めたより広範な人々に受け入れられていく要因ともなる。このヴェルディ・オペラの「ドイツ化」をめぐり問題について、台本分析などを通じて考察し、同時にヴァイマル共和国期の「ヴェルディ・ルネサンス」ともからめながら、その点の再検証を進め、ヴェルディ・オペラに新しい視点を照射することも本研究の大きな目的である。

(4) なお本研究における文化受容の考察は、「日本」対「外国」ではなく、「外国」の二国間（「イタリア」対「ドイツ」）の影響関係を対象とし、「日本」という第三者的視点からのアプローチを通して、それら二国における研究にはない成果の生まれることが期待され、そうした点で独創性を発揮することも本研究の目的の一つである。

## 3. 研究の方法

(1) 研究開始時点において、ヴェルディ・オペラに関する文献・映像資料は、これまでの科研費等を通じ相当数集まっているが、本研究では特に研究課題に直結した不足分の収集をさらに進める。それらの資料はある程度まで国内で入手可能だが、特にそれが困難な図書資料（研究書、楽譜、リブレットなど）

を多く必要とする本研究の性格に鑑み、各年度、海外に出かけて、図書館や研究機関での閲覧・収集や、新刊書店・古書店での資料購入の作業に従事する。本研究では、19世紀後半から20世紀前半にかけての、ヴェルディ・オペラのイタリアなどでの初演とその後のドイツでの上演の実態、それをめぐる観客・批評・世論の反応などの解明がその基礎をなすため、その貴重な情報源として、当時の雑誌記事の収集にも努める。また海外出張の際、大学などの研究機関を訪れ、これまで築いてきた協力関係を活用しながらさまざまな研究者との交流を通じて、最新情報の入手や意見交換を行い、本研究のスムーズな遂行に役立てる。またその際、劇場に赴き実地調査に携わるなど、理論と実践を融合した研究を目指す。オペラの学術的論考には、演劇・音楽・文学・思想・歴史など個別領域に引き寄せたものが多いが、本研究は総合舞台芸術であるオペラのメディア的特性を強く意識し、広範な領域を視野に入れた学際的アプローチを目指す。本研究者が所長を務めるオペラ／音楽劇研究所の定例研究会などを活用して本研究の過程で生まれた中間的な成果を随時公開し、多様な研究者との議論を通じて研究内容を深めていく。

(2) 既存の、あるいは新規に入手した文献・映像資料の解読・分析作業も、初年度より継続的に行う。本研究は、直前に終了した科研費による研究課題の一部に重点を置き、それを発展・深化させるものであり、それに関連する資料は一定程度、収集が完了しているので、現在行っているそれらの解読作業を継続・進展させ、それによって得られた成果は即時データベース化して整理・蓄積し、成果発表に備える。研究成果の定着のためにまず必要とされる資料の解読・分析作業については、研究目的に掲げた3点のテーマを、順次段階的に進めていく。こうして得られた成果

は各年度、学会誌や研究紀要への寄稿などの機会を活用して次第にまとまりをつけ、最終的にはそれを集大成し、著書などの出版物へと結実させることを目指す。

#### 4. 研究成果

(1) ベルリン自由大学、ベルリン・フンボルト大学、ボローニャ大学の図書館をはじめ、ドイツとイタリアの多くの研究機関や国内での作業に力を注ぐことにより、本研究を進展させるうえで必要な諸種の文献資料（リブレット、楽譜、雑誌記事、学術雑誌掲載論文、研究書等）および映像資料（オペラ上演を記録したDVDなど）を収集し、本研究を全面的に展開し、将来的にも本研究を継続発展させていくための基盤を形成することができた。

(2) そうした作業を進めながら同時に、収集した資料を用いて研究の進展を図った。特に文献の解読に関していえば、ヴェルディ研究を本格的に推進するためには少なくとも英語、ドイツ語、イタリア語で書かれた台本、研究書、論文などの解読が絶対に必要であり、収集した文献資料もほとんどがその三カ国語のものである。そのうち英語とドイツ語は、これまで長年の訓練により専門書類の講読にそれほど困難はなく、多くの文献に広く目を通し、多大の知見を得て論文執筆等に役立てることができた。イタリア語については、まだ専門書を自由自在に読みこなすまでにはいたらないが、鋭意語学能力の向上に努め、その結果研究開始当初と比べ文献の参照や資料の処理に必要な技能が相当程度身に付き、数編のリブレットや論文を原語で解読・分析するという成果を得た。

(3) そのようにして得られた種々の成果をデータベース化することが次の仕事となった。その作業を通じてシステムティックに整理された資料は、研究期間中に何度か行った

成果発信や研究交流の際、効率的に利用することができた。またそれらのデータは、今後、本研究と関連するさまざまな研究の局面において、きわめて効果的に活用できる状態にあり、本研究機関終了後にも継続して推進されるであろう研究にも大いに役立つものと思われる。

(4) 海外出張の際、さまざまな研究者と接触し、研究交流を試みたことも、本研究にとって重要なプロセスとなった。特に以前、長期滞在でゼミに参加したことがあり、その後も継続的にコンタクトを保ってきたベルリン自由大学の音楽および演劇ゼミナールや、国際共同研究をともにしたミュンヘン大学の演劇学、音楽学分野の教授や若手研究者との研究交流、意見交換は、この研究を進展させるうえで大きなプラスとなった。そのなかには博士号取得のためにドイツに留学中のイタリアの若手研究者も含まれ、彼らとの議論は、ドイツとイタリアを対象にそれぞれの文化的文脈に沿った受容の違いを明らかにしようとする本研究に多くの示唆を与えるものとなった。

(5) 本研究者は、2011年以來、自ら所長を務める早稲田大学オペラ／音楽劇研究所の活動に積極的に関わり、所属や専門領域を超えて集まった多くの研究者と恒常的に情報交換や研究交流を行ってきた。そこでは個人レベルで獲得した知見を広く議論の場に持ち出すことによって刺激を与えあい、本研究の内実を深めるうえで大きな力となった。特に目下、研究所で企画中のオペラ／音楽劇に関する研究書（『オペラ／音楽劇のキーワード』、2015年度中に刊行予定）のために本研究者もヴェルディに関わる原稿を執筆し、研究所の活動の一環として展開してきた、執筆者各自の原稿を持ち寄り展開した相互批評やディスカッションを通じて多くの研究者

と意見交換できたことは有意義であった。

(6) 実践的な研究の展開も、これまで述べてきた「座学」に加えて本研究の幅を広げる要因となった。先述の海外出張の際、三つのオペラハウスでレパートリー・システムによってシーズン中ほぼ毎日、日替わり公演を行うベルリンと、夏期にいくつかの都市でフェスティバルを催すイタリアの劇場でのヴェルディ・オペラの観劇体験がその一つであり、また交通の不便な北イタリアの小村にヴェルディの生家とのちに半生を過ごした農場つきの邸宅を訪れたことも、ヴェルディの人となりを理解するうえで有益であった。

(7) 以上述べてきた作業を通じて得られた研究成果については、学会や研究機関での口頭、あるいは雑誌投稿による発信によって結実させてきた。そのなかで『人文論集』2015（下記：〔雑誌論文〕①）では、広くオペラ研究の歴史と現状、さらにその方法論をテーマに掲げ、オペラ研究の進展が遅れた原因を探るとともに、最近の研究の目覚ましい発展を確認しつつ、今日の日本におけるオペラ研究の可能性を展望した。日本演劇学会における2013年の講演（下記：〔学会発表〕②）では、さらにその可能性について、日本の音楽劇である宝塚歌劇の研究の実情とも比較しながら、ヴェルディ・オペラの研究をめぐる今後の方向性について問題提起を行った。「ヴェルディ・オペラとは何か」と題する2013年の口頭発表（下記：〔学会発表〕②）では、ヴェルディ・オペラの全体像を整理し、その今日的意義を検証し、またドイツで刊行された研究書に掲載された2012年の論考（下記：〔図書〕①）では《アイダ》を取り上げ、宝塚歌劇によるその翻案ヴァージョン《王家に捧ぐ歌》との比較において、ヴェルディの実作品そのものの分析という角度からヴェルディのオペラの理解を深めた。さら

に『演劇学論集』2014（下記：〔雑誌論文〕  
②）では、本研究のテーマとより密接に関連する受容という視点でヴェルディ・オペラの検証をはかるといふ本研究のテーマ設定による研究の推進によって、特にイタリアとドイツの歴史や文化の違いについての考察が進展し、ヴェルディだけでなく、オペラそのものの本質理解が大きく進展した。2015年の口頭発表（下記：〔学会発表〕①）ではこれと関連してナショナリズムの問題に焦点を定め、ドイツとイタリアの19世紀における政治的ナショナリズムと文化的ナショナリズムの文脈において、リソルジメント・オペラとも関連させつつヴェルディ・オペラを受容の問題を考察し、本研究で設定したテーマ研究の核心にさらに一步近づくことができた。

(8) そうした学术界や広く一般に向けたアウトプットやその過程で得られた研究の進展は、当初目指したオペラそしてヴェルディの学術的レベルでの研究に一石を投じるといふ点においても大きな意義があったと思われるが、今後それらの原稿をもとにさらに研究を加え、その成果を本研究と関連する研究書へとまとめあげ、この分野の研究の活性化のためにさらに大きなインパクトを与えることを目指したい。

5. 主な発表論文等  
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

- ① 丸本隆「オペラの「虚像」と「実像」 — オペラは研究対象となりうるか?」『人文論集』(早稲田大学法学会)、査読なし、53 (2015.2) : 200-170。
- ② 丸本隆「ヴェルディとリソルジメント・オペラ — オペラ研究の(不)可能性をめぐって」『演劇学論集』(日本演劇学会紀

要)、査読なし(編集委員会からの依頼)、57 (2014.2) : 75-95。

〔学会発表〕(計3件)

- ① 丸本隆『オペラの「虚像」と「実像」 — ナショナリズム／トランスナショナリズムをめぐって』早稲田大学オペラ／音楽劇研究所・研究例会、早稲田大学(東京)、2015.1.31。
- ② 丸本隆『オペラ／音楽劇研究の(不)可能性とヴェルディ・オペラの場合』2013年度日本演劇学会全国大会総括講演(大会テーマ「宝塚歌劇と世界の音楽劇」) 共立女子大学(東京)、2013.6.23。
- ③ 丸本隆『ヴェルディ・オペラとは何か? — 受容・評価・解釈をめぐる諸相と変転のダイナミズム』早稲田大学オペラ／音楽劇研究所・研究例会、早稲田大学(東京)、2013.6.8。

〔図書〕(計1件)

- ① Marumoto, Takashi. "A Song for Kingdoms: Takarazuka's Attempt to Adapt the Opera *Aida*." Geilhorn, Barbara, et al., eds. *Enacting Culture. Japanese Theater in Historical and Modern Contexts*. Munich: Iudicium, 2012. 159-171.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

丸本 隆 (MARUMOTO, Takashi)  
早稲田大学・法学部・教授  
研究者番号 : 6 0 0 3 0 1 8 6

(2) 研究分担者

( )

研究者番号 :

(3) 連携研究者

( )

研究者番号 :